第１０課　告白から慰めへ

【暗唱聖句】

主よ、聞いてください。主よ、お赦しください。主よ、耳を傾けて、お計らいください。わたしの神よ、御自身のために、救いを遅らせないでください。あなたの都、あなたの民は、御名をもって呼ばれているのですから。」ダニエル書9章19節

【日曜日・神の言葉の重要性】

**「ダレイオスの治世第一年のことである。ダレイオスはメディア出身で、クセルクセスの子であり、カルデア人の国を治めていた。さて、わたしダニエルは文書を読んでいて、エルサレムの荒廃の時が終わるまでには、主が預言者エレミヤに告げられたように七十年という年数のあることを悟った」ダニエル9:1，2**

メド・ペルシャによってバビロンが滅ぼされた年（紀元前539～538年ころ）、ダニエルはエレミヤ書を読んでいました。おそらく、国が変わってこれから民はどうなるのか、そして8章における「聖所の荒廃がいつまで続くのか」という一連の幻のことを考えながら、聖書を紐解いていたのでしょう。すると、ダニエルはエルサレムの荒廃の時が終わるまでには、七十年の年数であることが書かれているのを発見するのです。

**「この地は全く廃虚となり、人の驚くところとなる。これらの民はバビロンの王に七十年の間仕える。七十年が終わると、わたしは、バビロンの王とその民、またカルデア人の地をその罪のゆえに罰する、と主は言われる。そして、そこをとこしえに荒れ地とする」エレミヤ書25章11、12節**

**「主はこう言われる。バビロンに七十年の時が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは恵みの約束を果たし、あなたたちをこの地に連れ戻す」エレミヤ書29章 10節**

バビロン捕囚は紀元前605年のときから始まり、合計4回にわたって行われました。つまり、もう間もなく70年が満ちようとしていることが分かったのです。そしてその通り、この後しばらくして順次ユダヤ人たちの解放が始まります。このことから、どれほど辛いことがあったとしても永遠に続くことはなく、神様のご計画と許しの範囲でのみ起こることがわかります。そして、ダニエルと同じように、地球史の終わりに差し掛かっている今、わたしたちも熱心に聖書を研究し、神様の御心を知ることが大切です。

【月曜日・恵みに訴える】

**「わたしは主なる神を仰いで断食し、粗布をまとい、灰をかぶって祈りをささげ、嘆願した」ダニエル9:3**

ダニエルは70年で捕囚期間が終わることを知った後、「断食し、粗布をまとい、灰をかぶって祈りをささげ」ます。このような祈りは、切なる祈りの現れであり、悔い改めと赦しを乞う祈りでもあります。この祈りの背景には、ユダヤ人が捕囚となったのは、神様の教えを守らずかたくなだったことが御言葉からわかったからです。そして、ユダヤ人のかたくなさがお約束の成就を遅らせるのではないか、そのような不安があったからではないかと思われます。それゆえ、この祈りの中には、神様にユダに行った災難の説明を一切求めておらず、自分たちが犯した罪を告白し、憐みと赦しを乞い、次のように祈っているのです。

**「わたしたちは罪を犯し悪行を重ね、背き逆らって、あなたの戒めと裁きから離れ去りました…あなたに背いた罪のために全世界に散らされて…今日のように恥を被っているのは当然なのです…わたしたちが正しいからではなく、あなたの深い憐れみのゆえに、伏して嘆願の祈りをささげます。主よ、聞いてください。主よ、お赦しください…わたしの神よ、御自身のために、救いを遅らせないでください。」（ダニエル9:5～19）**

【火曜日・執り成しの評価】

ダニエルの祈りは、エズラやネヘミヤと並んでしばしば旧約の三大懺悔祈祷と言われています。この祈りの特徴は、**「わたしたちは罪を犯し悪行を重ね、背き逆らって、あなたの戒めと裁きから離れ去りました」（9:5）**とあるように、モーセが民を執り成したときの祈りと同様に、民の犯した罪を自分自身の罪とみなして神様に赦しと憐みを乞うていることです。そして、ダニエルのこの祈りの中心にあるのは、自分たちが早く解放されたいということではなく、**「わたしたちの神よ、僕の祈りと嘆願に耳を傾けて、荒廃した聖所に主御自身のために御顔の光を輝かしてください」（ダニエル書9章17節）**とあるように、聖所の問題が中心にあります。つまり、神様を中心に祈っているということです。この点は見逃してはならないことでしょう。

【水曜日・油注がれた者の働き】

**「彼はわたしに理解させようとしてこう言った。「ダニエルよ、お前を目覚めさせるために来た」ダニエル9:22**

ダニエルの祈っていると、再び天使ガブリエルが飛んできます。彼は、「ダニエルよ、お前を目覚めさせるために来た」と語ります。それは神様のご計画を理解させることを意味していました。ガブリエルは神様からのメッセージを伝える前に、**「お前は愛されている者なのだ」（9:23）**と告げ、**「この御言葉を悟り、この幻を理解せよ」**と続けます。必至な祈りの中で、わたしたちも「あなたは神様から愛されている」との言葉を聞くことでしょう。それは心の中に平安となって広がっていきます。それから、ユダの民とエルサレムに対して定められている70週の預言について語り始めます。なんとエルサレムに帰還することだけでなく、その先のことまで伝えたのです。エルサレムの帰還は、その後に続くさらに重要なことの始まりに過ぎなかったからです。

**「お前の民と聖なる都に対して七十週が定められている」（9:24）、**とはユダヤ民族にとっての猶予期間です。この期間に彼らの運命は決するのでした。それが過ぎると、6つのことが起こります。

1. 「逆らいは終わり、罪は封じられ」…神への反逆は制圧され、罪は封印されます（赦されます）。
2. 「不義は償われ、とこしえの正義が到来し」…キリストの十字架により不義が償われます。
3. 「幻と預言は封じられ、最も聖なる者に油が注がれる」…封じられとは確証するという意味で、キリストの預言が成就するということ。また「最も聖なる者」は誤訳で、正しくは「聖なる場所」、つまり天の聖所においてキリストが執り成し働きを開始するということです。

【木曜日・預言の年表】

ガブリエルが再びダニエルのもとに来たのは「2300の夕と朝」の幻から10年が経過していました。ついに、ここで「2300の夕と朝」、聖所が清められて正しい状態に戻るのはいつなのか明らかになります。それは70週の預言が、この「2300の夕と朝」から切り取られている（日本語訳は「定められている」）と書かれてあるからです。70週の預言の起算点は、「エルサレム復興と再建についての御言葉が出されてから」（9:25）とあり、この命令はアルタクセルクセス王によって紀元前457年に出されました。1日は1年と解釈する預言の法則から、紀元前457年から2300年後の1844年に聖所が正しい状態に戻ることがわかります。またユダヤ人に定められた期間は490年（70週は490日）後の紀元34年までであることがわかります。

　また490年は、**「油注がれた君の到来まで七週あり、また、六十二週あって」（9:25）**とあるように、最初の7週（49年）と62週（434年）と、そして残り1週（7年）に分けられ、さらに最後の1週は、**「一週の間多くの者と同盟を固め、半週でいけにえと献げ物を廃止する」（9:27）**と重要なことが書かれてあります。最初の7週つまり49年というのは、エルサレムが再建されるまでの期間を現わしています。次に、434年後の西暦27年に油注がれた君であるイエス・キリストが到来します。そして半週（三年半）後に「いけにえと献げ物を廃止する」わけですが、これは十字架によって、いけにえの動物を捧げる犠牲制度が廃止されたことを意味しています。そしてその34年に、ステパノが初めて殉教し、ユダヤ教とキリスト教が完全に決別し、異邦人伝道へと展開していくことになります。すべて預言の通りです。